平成 19 年東アフリカ・ケニアにて日本・ケニア共同開催で第一回の植樹祭が催された。それにボランテアとして参加したエコツアーで見聞したことを紹介する。

「キリマンジャロの雪」　　遠藤政二

「雪が年々と少なくなっています・・・」
アフリカ大陸の最高峰、海抜 5,895mのキリマンジャロ山の麓に広がる大草原の野生動物保護区、アンボセリ国立公園でゲームドライブをしている時である。
「思ったより、雪が少ないね」という私の問いかけに、車を運転していたガイドのダンカンがぽつりとつぶやいた。

（写真 1）キリマンジャロ。

アンボセリから望むキリマンジャロは実に雄大である。富士山と同じく単独峰であり、左右になだらかな稜線が視野から外れる位どこまでも伸びている。山頂の平坦部分は富士山の 10 倍以上は有りそうだ。何よりも、その広い裾野に邪魔になるような建造物は何一つ無い。
視野に入る部分が全て、所々にブッシュがあるだけの草原、いわゆるサバンナなのだ。
富士山が女性的な優美な姿とすれば、こちらはどっしりと安定し、肩幅の広い男性的な雄姿をおもわせる。日本人が富士山を好きで、誇りに思うように、ケニアの人にとって、キリマンジャロは特別な存在である。サハリの間も雲が切れて山容が見えてきたり、見える角度が良い場所に行くと、「キリマンジャロだ。見てください。良い山でしょう」と大声で何度も注意を喚起してくる。
そのダンカンが「雪が少なくなっている」と答えた時は、小声で少し寂しそうだった。

6,000mに近い高山だから、当然万年雪に覆われている。ヒマラヤやカラコルムで同程度の山を見ているので、山の大きさに比して物足らなさを感じていた。頂上の雪はもっと膨らみがあっても良いし、下の裾野近くまであっても良いのではないかと思った。以前絵葉書の写真でみたものより、はるかに雪が少なく貧弱にさえ感じた。
ダンカンの言葉によると、昔はもっと雪があったのだが、年々少なくなっていて、近年は特に減少しているという。
今地球上では極地の雪が解け出したり、砂漠化が拡大したり、異常気象の発生が各地で起こっている。地球温暖化の影響と言われているが、ここキリマンジャロにもその証拠が確実に現れている。

最近、ＴＶでキリマンジャロの頂上にある氷河の状況を映像で見る機会があった。
10 年前に、同じ登山家が登って撮影したものと現在を比較した映像だが、その変貌ぶりには唖然としてしまった。10 年前の山頂は完全に氷河に覆われていた。それが殆ど無くなっているのだ。小山のような氷雪は所々に残っているが、かなりの割合で土が露出しまっていた。圧倒的に土の部分が多く、氷河の部分は 10 分の 1 にもみたない状況に見えた。これでは、アンボセリで見たときに雪が薄く見えたのも当然である。

ＴＶの解説ではインド洋から吹き上げる風が弱くなり、そのためにキリマンジャロに雪が降らなくなり、強い日射で今まであった氷河が解けることなく昇華しているという。そのうちにキリマンジャロに雪が無くなってしまうかもしれない。地球の温暖化が引き金になって、地球上で大きな環境変動が起こっている。そう思わせる映像であった。

ケニアへ行く

私にとって野生動物の王国と呼ばれているケニアは少年時代の頃から行きたい場所の一つでした。
暗黒大陸と言われていたアフリカ大陸のナイル河源流やビクトリア湖の探検記やリビングストンの伝記等は愛読書だった。
ケニア、タンザニア、ウガンダ等の東アフリカ地方にある大地溝帯周辺が人類発祥の場所といわれていることもあり、今更この年になって、探検や調査は出来ないが、機会があれば旅行に行く気持ちはずっと持ち続けていた。

アフリカにはサハラ砂漠とその北部のマグレブ地方には旅行で訪れたことがあるが、サハラの南にはなかなか行く機会が無かった。
それが、昨年の春にケニアで第一回の植樹祭が日ケ共同で行うことになり、ボランテアとして参加する機会が訪れることになった。

仕事を終えて自由の身になってから、植林のボランテアをボルネオ島の熱帯雨林で 10 年継続している。
このプロジェクトは横浜に本部が有る「国際生態学センター」とマレーシアの国立農業大学（ＵＰＭ）とが共同で熱帯雨林の再生手法を研究している中で進められている。
現地スタッフが種子を集めて、ポット苗を作り、その苗を我々日本から行くボランテアと地元の学生達で木材伐採、焼け畑や色んな開発で失われた森林の場所に共同作業で植樹をする。その生育状況を観察記録して、通常では困難な熱帯雨林の再生を 50 年位で出来る手法を確立するという計画である。
2025 年までは研究を継続することにしているので、まだまだ先が長い。

この研究を基にして、効率の良い森林再生の手法が判ってきて、日本の各地をはじめとして海外においてもセンターが指導し、地元行政と一緒に植樹祭をして、森林再生の普及を現在はかっている。
今回のケニアでの植樹祭は 2005 年 2 月に植物生態学者で横浜国立大学の名誉教授でもある宮脇昭センター長と毎日新聞の招聘で來日していたケニアの元環境副大臣でノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ女史が会談した時に決められた。

マータイ女史はご存知のように、30 年前から地球の環境改善に森林の重要性を訴えて、彼女を支持する人たちと「グリーンベルト運動」（ＧＢＭ）を創始し、今までに 3000 ヶ所で四千万本の樹を植えた草の根活動家である。その功績で環境活動では始めてのノーベル平和賞を受賞した人である。
また来日した時に覚えた日本語の「もったいない」という言葉が、自分達の進めている 4Ｒ運動（Reduce,Reuse,Recycle,Respect）の精神を簡潔に表しているとして、世界の合言葉にしようと国連を舞台に活動している。日本でも、「もったいない大臣」と呼ばれて親しまれている人である。

一方、宮脇昭センター長は横浜国立大学時代に日本全土を歩き回って日本植生誌を纏め上げた先達である。退官後に「国際生態学センター」を創立して、生態学的な手法による森林再生を提唱し、市民主役の植林活動を日本で１４００ヶ所、海外でも数ヶ所で森林再生方法を指導し実践している。その功績から環境関係のノーベル賞といわれている国際的な賞のブループラネット賞を 2006 年に日本人として初めて受賞している。
ＴＶにも何度も出演されているし、「植物と人間」「あすを植える　地球に命の森を」等著書も多いのでご存知の方もいると思うが、私のボルネオでの熱帯雨林再生ボランテアをしている時の先生でもある。
この２人が会って、ケニアと日本が協力して、ケニアに自生の樹による 1000 年残る森作りを、今までのマータイ女史の植樹運動をさらに発展させたエコロジカルな方法で実施することが話しあわれた。

そこから、現地の植生調査、育苗、植樹祭の開催についての現地行政機関との交渉を経て、2007 年 4 月にようやく第一回の植樹祭を開催出来るはこびとなった。
我々ボランテアグループにも参加の呼びかけがあり、私も参加することを決め、ケニア行がようやく実現したのだ。
この種のエコツアーは一般の旅行と違うので、いろんな場所を見て廻ることは出来ない。しかし、植樹を共同作業で行うので、地元住民と直接のふれあいを持つことが出来るし、観光地として整備されていない場所にも行ける。ケニアの現在を知る上でその方が好ましいと思い、即参加することを決めたのだ。
前置きはこのくらいにして、ここからは行程に沿って話を進めることにする。

ケニアへの道

2007 年 4 月 22 日、私は羽田空港にいた。夜 9 時の出発で関西空港、ドバイを経由でケニアのナイロビ空港までエミレーツ航空のフライトに乗ることになっている。
途中、関西空港で 1 時間強、ドバイ空港で 4 時間半の待ち合わせ時間があるので、ナイロビまで結構時間がかかる。トータルで 25 時間強の長時間フライトになる。
以前にアフリカに旅行した時は、ヨーロッパ経由であったが、アラブ首長国連邦のドバイ空港が整備され、東アフリカや南アフリカに行くのが、それでも依然よりだいぶ便利になっている。
参加したボランテアの一行は 35 名。今回は第一回なので、一般公募はされていない。
ボルネオ、アマゾン、中国等で海外植樹を経験している者ばかりである。長年ボルネオで一緒に作業している仲間も多数いるので、長いフライトでも退屈することはない。

中でも真鶴半島に住んでいる山本さんは植林を通じての友人である。この 10 年、どちらからともなく誘い合って、一緒に出かけていっては一緒に作業をしている。
彼は私より数歳若い。現役時代は貨物船に乗っていて、日本人が海外で伐採した木材を日本に運ぶ仕事に従事していた。
日本の伐採の現実も知っているし、間接的ではあるが、熱帯雨林の減少に加担したとして、退役後はボルネオの植林ボランテアを続けている。
普段、岩場の多い真鶴の海で貝採りを楽しんでいるので、旅行のときには自分の採取した、さざえやとこぶしの煮物を必ず持参してくる。
お酒のつまみには最高なので、まずは空港の待合室で早速に自販機の缶ビールでお互いに元気な事を祝して乾杯をして、機内までそれは続くので長いフライトもあっという間に着いてしまう。
海外での植林ボランテアは体力的にけっこうきつい。気の置けない仲間がいるのはお互いに心強いし安心もできる。

関西空港で関西方面の参加者と合流し、一気にドバイへ向かう。14 時間半の夜間フライトで早朝 5 時半にドバイ空港に到着した。ここで、ナイロビ行きに乗り換えるが、5 時間弱の待ち時間がある。
ドバイといえばオイルマネーで砂漠や海岸の埋め立て地に豪華なリゾート都市を建設して、現在世界中の注目をあびている所である。もう少し時間があれば空港の外に出て
見学したいところだが、早朝で、しかも空港は離れているから仕方がない。空港内の
土産物を見て歩くか、椅子に座って休んでいるしかない。

ドバイ空港は新しく大きく広い。近代的な建物でリゾート地の空港らしく待合場所には大きな椰子の木が配されていて、エキゾチックなムードがある。トランスポートにある免税店は世界中どこに行っても同じものしかなく、現地の民芸品の店は少ない。
結局、椰子の木の下の椅子に座って、通過する人の波を見て時間を潰した。
この空港はアフリカ、中近東と欧州の中継地として広く利用されているので、色んな民族衣装を着た人が通っていく。アフリカ系は原色の派手な衣装なので、面白い。
民族によって色も形も違っている。アクセサリーも大きく派手なものである。中近東の人達はその逆で、白一色、たまに薄い青の衣服を着て、被り物に多少の変化があるだけの簡素なものである。女性の中にはイスラムの肌を出さない戒律を守って黒一色で目しか出してない衣装を着ている人もいる。日本の空港では見られない、どこの国の人なのか想像しながら眺めていると、結構、時間が経つのが早いものである。

ドバイからナイロビまでのフライトは5時間くらいである。
日中で晴れていたので、窓から下の景色が良く見える。アラビア半島の砂漠地帯、青い海を経てアフリカ大陸に入る。空から見ても耕地は少ない。荒れた土地だということが第一印象である。
午後の 2 時すぎにいよいよ目的地に到着する。ケニアの大地に初めて降り立ったのだ

（写真 2）アンボセリ国立公園から見たキリマンジャロ。

ナイロビからニエリへ

　ナイロビ空港で出迎えていた 8 台のサハリカーに分乗する。座席に 6 人が乗れる大型の四輪駆動車、トヨタのランドクルーザーをベースにサハリ用に改造したものだ。
　私の乗った車は 3 号車で、その車のドライバーがダンカンだった。
ここから、すべての日程が終わる迄同じ車で移動することになる。幸い彼の話す日本語は片言ながら日常会話の範囲では不便でないくらい話が出来る。おそらく大学を出ているのだろう、話す内容から教養も感じられ、ユーモアもある。

　ケニアでは観光のガイドは高給取りの部類に入る。暮らし向きは良いに違いない。身なりもこざっぱりしていて精悍な顔をしているが親しみがある。

（写真 3）サハリ車。中央で腕を組んでいるのがガイド兼ドライバーのダンカン。

　この日は空港から真っ直ぐケニアの中央部に在る地方都市のニエリに行って、そこで宿泊することになっている。
　ニエリは観光客が行くようなところではない。マータイ女史の故郷で彼女のグリーンベルト運動の発祥の地であり、最初に植林活動をした所だ。その状況を見学するのが目的である。
　ただ、近くに動物保護区になっているアバーデア国立公園があるので、そこも合わせて訪れる予定にしている。アバーデアは観光客に人気のあるケニアの国立公園の一つである。

　ケニアのナイロビ空港は国際空港にも関わらず小さい。日本の地方空港並みの大きさで、運行便数も少ない。まずは空港の銀行の窓口でドルから現地通貨のシリングに換金する。エコツアーなので、みやげ物を購入する機会もあまりないし、余すと現地ででも再換金できないので使い切る必要がある。ビール等の飲み物代として五千円を取り敢えず代えておく。
　到着した日は快晴、赤道に近いが海抜が高いこともあって暑くない。ちょうど東京と同じくらいの気温だが乾燥しているのでさわやかな風が吹いて気持ちよい。
　空港の敷地を出ると、そこはもう草原になっている。見渡すばかりの草原で遠くに山も望めない。そこにキリンが数頭、のんびり首を垂らして草を育んでいた。早速の野生動物のお出迎えかと一同色めきあうが、不自然なところがある。キリンは首を長くして、樹木の葉っぱを食べるはずだが、ここにはブッシュが有るだけで樹がない。どうやら、観光客へのサービスのつもりでそこで放牧されているのだろう。低い木の柵が道路に出てこないようにめぐらしてあった。

　ナイロビには後ほど植樹祭の時に一泊することになっているが、この日は街外れを通過するだけである。
ナイロビは人口 220 万の国際都市なのでさすがに高層ビルが立ち並んでいる。
ここが今日の目的地でないので、中心街には入らずに郊外の道を通るが車道が 2 車線しかなく自家用車で渋滞している。
　ダンカンの話によると、ナイロビは最近渋滞がはげしく時間がかかって大変だということだ。走っている車には結構日本車が多い。

（写真 4 左）オフィス街。雨の後で濡れている。

（写真 5 右）日中の車は流れていた。信号はいたって簡素なものだ。

「こうの鳥がいるよ」ダンカンの声に指差す方向を見ると中央分離帯にある並木の上に大きな巣とこうの鳥が 2 羽いた。人と車で賑わっている商店街にある 10mくらいの樹の上である。日本では絶滅危惧種といわれている鳥なのに、こんな街中で見られるなんて、さすがアフリカと感心させられた。

それから並木を注意して見ているとこうの鳥のみならず、色んな鳥の巣が見える。それもかなりの数がある。

商店街はコンクリート製の 2 階建ての商店が長屋みたいに並んでいる東南アジアで見る風景と変わらないが、さすがに歩いている人は肌の黒い人が殆どであった。

（写真 6）商店が並ぶ前の木のてっぺんにコウノトリの巣があった。

郊外を離れると、住宅は木造の粗末なものになる。ニエリまでの道路は幹線道路の一つである。車の通る車線は舗装されているが、路肩は土のままで、スコールで水溜りになったままの所が残っていて凸凹である。その道から一段下に住宅が連なり、露天のような商店がある。時々、新しく建設された、コンクリート製のアパートが立ち並ぶ住宅団地が見られた。

樹は見かけるがまとまった森のようなところはあまりない。荒れたままの土地が放置されたままになっている場所が多い。

ケニアに初めてきた初日なので、興味をもって、車の窓から景色を眺めていると、意外な店が多いことに気がついた。

道路沿いに露天の植木屋が多い。ただ苗木を並べているだけなのだが、それが片方だけでなく、道路の両側に続いている。

（写真 7）郊外のアパート。電柱の向こうに露天の植木市がある。

車で結構走ってもまだ続いているし、とぎれてもまた新しいのが始まる。降りて見るわけに行かなかったので、どんな種類の苗なのか、売られていたのか無料で配布されていたのかも判らない。まわりを見ても住宅に木や花にそれほどの関心が高いとも思えない。しかし、郊外でこれ程の苗木が集められているのを今まで見た経験はない。ダンカンにその理由を聞いておけば良かったといま後悔している。

ニエリまでは 4 時間かかる。しばらくの間サバンナが続き、ニエリに近づくにつれて樹が多くなり林を形成してきている。ここは海抜 5,200mのケニア山の裾野にある 2000mの高原地帯である。赤道直下にもかかわらず涼しくさわやかな気候であった。

（写真 8）ケニア山。ニエリの入り口。

ニエリに入ると一面に紅茶畑が広がっていて、日本の茶畑の様に手入れは行き届いていないが、家の造りが違うだけで、静岡辺りの風景とさほど変わらない。

日本ではあまり知られていないが、少なくとも私は訪れるまで知らなかったが、紅茶はケニアの特産物である。100 年前に英国の企業により、プランテーションが始まり、英国からの独立後も外貨獲得の重要な産業として奨励されて、インド、中国に次いで世界第三位の生産量になっている。日本にも年間千トンを超える量が輸入されているという。紅茶といえば、我々はまずインドのダージリン、アッサムやスリランカのセーロンを頭に浮かべるが、ブレンドされてケニア産の紅茶を我々はかなり飲んでいることになるらしい。ケニアには紅茶のプランテーションが各所にあるが、ここニエリもケニアの紅茶産地の一つであった。

～～～